

KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

短期大学部における英語必修科目再履修クラスの単位修得率を向上させるための教授・学習方略の研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部 公開日: 2016-09-05 キーワード (Ja): 学習意欲, 再履修クラス受講理由, 支持的風土, 単位修得率, 授業理解度 キーワード (En): 作成者: 原, めぐみ メールアドレス: 所属: 関西外国語大学短期大学部
URL	https://doi.org/10.18956/00006054

短期大学部における英語必修科目再履修クラスの 単位修得率を向上させるための教授・学習方略の研究

原 め ぐ み

要 旨

短期大学部における、英語必修科目再履修クラスの単位修得率を向上させるための教授・学習方略を探り出すことがこの研究報告の目的である。そのために、再履修クラスの学生に対し、記述式アンケート調査で学生の実態と意識の把握を行った。その結果、学習意欲の低下や不規則な生活習慣から欠席が重なったことが、主な再履修クラス受講理由として浮かび上がってきた。さらに事前調査から、単位修得や言語学習に対する不安を持った学生や、英語力に対する自己評価が低い学生が多いことが判明したことから、再履修の学生が抱えている授業不安を克服する手立てとして、支持的風土を重視した授業設計と実践を行った。その結果、対象クラスの単位修得率は、74.2%になった。事後調査の結果から、授業理解度の深化やクラスの人間関係を重視した授業実践が寄与しているものと考えられる。

キーワード：学習意欲、再履修クラス受講理由、支持的風土、単位修得率、授業理解度

1. はじめに

近年の大学での中退者増加傾向に伴い、2014（平成26）年1月文部科学省は、今年度からすべての国公立私立大学を対象に、中退者数や中退理由について調査を行い内容の分析をすることに決定した。

本学においても、平成24年度に短期大学基準協会が行った第三者評価において、改善点の一つとして「退学者が少なくはなく、学生一人ひとりに対してきめ細やかな指導が必要である」との指摘を受けている。退学には様々な理由が考えられるが、単位未修得、留年、再履修クラス不合格、除籍あるいは退学という経緯をたどる学生が多くいる。このような負の連鎖を断ち切るために、再履修クラスが果たすべき役割は大きいと思われる。

2. 問題と目的

2013（平成25）年度の春学期 Integrated English B: Writing & Discussion of Social Issues¹⁾

(以下Integrated English B) の再履修クラスの登録者は20人程度であったが、継続科目である秋学期のIntegrated English Dの再履修クラスの登録者は、70人程度に増加した。このような状況の中で、再履修に至った理由を把握することで、再々履修率を減少させる方略を探ることができると考えた。この研究の目的は、再履修となる理由を明かし、それを解決するための授業設計と実践によって、単位修得率を向上させることである。

3. 研究の背景

3.1 再履修受講理由

大学での英語必修科目再履修クラス受講理由に関して、津田(2007)が九州地区の3大学で行った調査によると、出席日数不足、定期試験の点数不足、平常点不足が原因として挙げられている。平田(2010)による本学外国語学部の必修科目再履修者を対象とした調査でも、出席日数不足、英語への興味低下、提出物未提出が主な理由であると述べられている。上記の理由以外にも、短大生特有の理由がある可能性も予想されるため、本研究では、記述式アンケートを行うことにした。

3.2 リメディアル教育における学習者の自尊感情と教員の役割

清田(2010)が行った英語リメディアル教育²⁾に関する研究では、リメディアル教育では今まで基礎学力の向上という学習面が重視されていたが、学習者の自尊感情における否定的な意識を考慮すると、「自己表現」と「対人関係」をキーワードとした自尊感情を向上させる授業の必要性があると主張している。さらに清田(2010)は「従来の大学では当たり前とされてきた知識伝達型の教授者から、学習集団内の良好な人間関係の構築を促進するコーディネーターとしての役割が必要となる」と、教員の役割に関する多面性の重要性を示している。

4. 研究の方法

4.1 研究の枠組み

2013(平成25)年度秋学期当初にIntegrated English Dを再履修している学生35名のうち28名を対象に、再履修クラス受講理由を明らかにする目的で、質問紙調査を9月と12月に行った。9月の事前調査では、英語の4技能に対する自信度、伸ばしたい英語のスキル、授業の理解度、学習意欲、将来の目標、授業に対する不安要因、外国に対する興味などを問う30の質問項目からなる質問紙(資料1)をデザインし、5件法で回答を求めた。学生個々の具体的な状況を探り出すために、質問紙調査に記述式回答項目「再履修クラスを受講している理由は何で

すか」を含め、その結果をKJ法³⁾により分析した。

12月の事後調査では、授業実践に対する評価や英語学習に対する意識の変化などを探るための15項目からなる質問紙を用いた(資料2)。昨年度からの変容を明らかにするために、「昨年度と変わった(変えた)ことは何ですか」という記述式の項目を設け、その結果をKJ法により分析した。

表1：研究の流れ

	9月	10月	11月	12月
授業回数	6回	8回	8回	7回
調査	事前調査		事後調査	

4.2 調査対象

短大1年次(昨年度)英語必修科目のIntegrated English Dの単位を修得できなかった学生が登録されている再履修2クラスのうちの1クラス35名(秋学期当初の履修学生数)を対象とした。筆者が担当している再履修生の英語習熟度の差は大きく、GTEC⁴⁾によってレベル分けされた上位のクラスから下位まで多岐にわたっており、履修者の内14名(40%)の学生は留年をしている。

4.3 授業の概要

Integrated English Dは、統一シラバス、統一カリキュラムで実施されており、*Great Paragraph 2*をテキストとして使用している。ライティングの基礎を学びながら、同時開講のIntegrated English Cで使用されているテキストの*Insights for Today*で学んだ社会問題の内容に関するパラグラフ・ライティングができるようになることが、この授業の到達目標の一つとして設定されている。1年次は全クラスを外国人教員が担当していたが、今年度の再履修クラスは、日本人教員が担当している。成績の40%を占める中間・期末試験は、クラス単位ではなく統一テストで行われ、テキストに沿った選択式問題20問とパラグラフ・ライティング1題からなる試験だった。

4.4 授業展開

Integrated English Dの週2回の授業において、パラグラフを完成することを最終プロダクトとして位置づけ、ライティング・タスクに到るプロセスが、次のタスクへのscaffolding(足場・支援)になるように工夫した。以下に授業展開の例を示す。

週前半の授業回(パラグラフ・ライティングの準備)

① Q&Aや画像・映像使用によるトピックの導入

- ② リスト作り、グループ・ディスカッション、プレゼンテーションにより理解を深化
- ③ ライティング課題の設問を確認
- ④ プレインストーミング
- ⑤ アウトライン作成

週後半の授業回（パラグラフ・ライティング）

- ⑥ ライティング
- ⑦ ピア・エディティング⁵⁾
- ⑧ 課題提出（評価とフィードバックを付け次回の授業で返却）

5. 結果と考察

5.1 事前調査の結果（9月）と考察

受講者に対して実施した学生の英語力自己評価や学習動機に関する質問紙調査では、26名（資料1）から、また記述式項目については28名から有効回答が得られた。記述式回答をKJ法によって分析した結果を図1に示す。

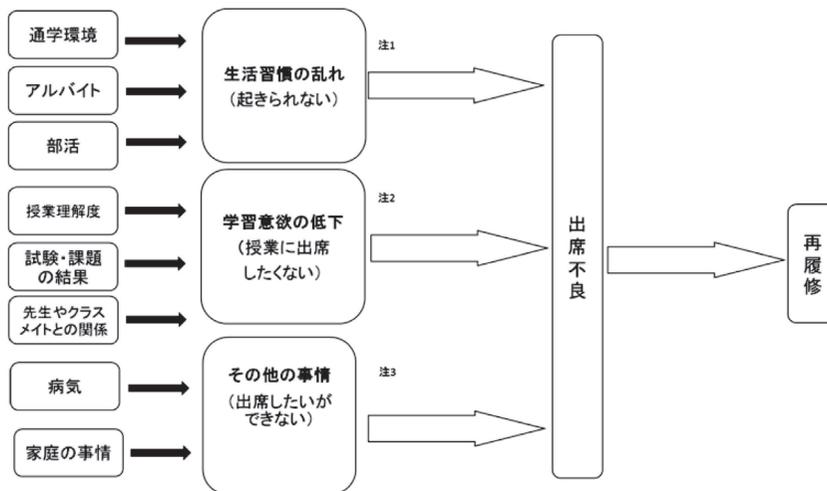


図1：再履修クラス受講理由

注1：『生活習慣の乱れ』については、「バイトを夜遅くまでしていて、1限の授業を休みがちだった」「自宅から2時間かかるから起きられなかった」「部活動を始めてしまったせいで、毎朝早く起きるのが苦痛だった」等の記述があった。

注2：『学習意欲の低下』については、「先生が何をしているのか、何について話をしているのか、わからなかった」「先生が厳しかった」「文章を書くことがあまり好きではないので、難し

かった」「クラスの輪に入りづらかった」等の記述があった。

注3：『その他の事情』については、「親の入院で実家に帰っていて出席日数が足りなかった」「体調不良で授業の多くを欠席した」等の記述があった。

5.1.1 学習意欲の高さと不安要素

質問紙調査の結果から「ライティングが得意だ」などの4技能に関する自信度は低い（平均2.15から2.62ポイント）、「語彙力、リスニング力、リーディング力、スピーキング力をつけたい」という項目に対しては、すべて平均が4ポイント以上あり、その中でも「スピーキング力をつけたい」の平均が4.54ポイントと一番高い。「TOEICなどの試験で高得点を取りたい」（4.23）「ライティングやテストで高評価を得たい」（4.42）などからも、再履修クラスではあるが、単位さえ修得できればよいと思っているのではなく、学期の初めには、英語運用能力を高めたいという意識が強く働いていることが窺える。この英語力を高めたいという気持ちを学期末まで維持させる教授・学習方略を工夫することが求められていると考えられる。

記述式回答の結果からも、編入や留学、除籍・留年回避といった目標や結果と学習成果をリンクさせる傾向が見られ、「今回は、遅刻も欠席もしない」という強い決意を持って再履修クラスに臨んでいるという記述が15件あった。それと同時に「去年と同じことを繰り返さないか不安」、「履修している授業が多いので単位がとれるかどうかわからない」という不安を抱えている学生もいることが判明した。「新しいクラスは不安だ」という質問項目に35%の学生が「そう思う」「少し思う」と答えていることから、学生の不安要素を克服させる戦略を授業に取り入れることが重要であると考えられる。

5.1.2 出席不良の原因

図1から、昨年度不合格になった主な原因として学生が認識しているのは、「朝起きられない」という理由から、欠席回数が増えたという記述が20件あった。生活習慣が乱れていた理由として、「深夜までのバイト」、「一人暮らし」、「通学に時間がかかる」などが挙げられていた。欠席回数以外の理由では、「授業の理解度」、「課題の未提出」、「テストの点数不足」など授業内容に関するものが9件あった。「先生が厳しい」、「クラスになじめない」などの人間関係に関する記述は3件あった。少数ではあるが、「健康面」での理由や「家庭の事情」で授業を欠席した者、「期末試験を受けなかった」ために不合格になった学生や、「春学期は大丈夫だったが、秋学期に履修科目が多くなった」という理由で単位を落とした学生もいた。

今学期は、欠席や遅刻を防ぐために、学生が遅刻・欠席をする場合はメールで理由を連絡することを義務付けた。メールをせずに休んだ学生には、次回出席した際に欠席理由を聞くようにした。短いメールであっても、個々の事情がわかるものがあり、担当者が一方的に怠けてい

ると決め付け注意することがなくなり、学生との意思疎通に役立った。遅刻に関しては学期初めから厳しく指導し、一定の時間を越えて入室した学生には、欠席扱いになることを説明した上で、授業に参加させた。クラスの人間関係ができた後は、遅刻や欠席に対して、学生相互で注意するようになった。

5.2 授業実践

5.2.1 動機づけを維持する指導方略

9月の事前調査によると、学期初めの段階では、「英語力を伸ばしたい」という高い学習動機はあるものの、「また不合格になってしまうかもしれない」という学習不安も抱えていることがわかった。このような学生の実態を考慮し、教室内での動機づけを持続する指導ストラテジーに基づいた授業実践が、再履修クラスには効果的であると考えた。

Dörnyei (2001) は、教室内で動機づけを持続させる方法の一つとして、学生の自尊心を守り自信を高める必要性を述べている。そのためには、成功体験の機会、学習者への激励、言語不安⁶⁾の軽減、学習ストラテジーの指導という4つの方略が重要とされている。本研究では、事前調査から学生の再履修クラスに対する不安要素が表面化したため、4つのうちの言語不安の軽減に関するストラテジーと協同的学習集団の促進を目指したストラテジーを採用し実践した。

5.2.2 授業内での言語不安を軽減する具体的なストラテジー

Dörnyei (2001) は、学習環境での不安を引き起こす要素を取り除き減少させることによって、学習者の言語不安を軽減できる具体的なストラテジーとして以下の4つを挙げている。

- ① 比較は避ける。
- ② 競争よりも協同を推奨する。
- ③ 学習者が間違いを学習の一部と受け止めるように手助けする。
- ④ テスト内容や評価の基準を学生に分かりやすくする。

5.2.3 授業内での言語不安を軽減するストラテジーの応用と実践

- ① 習熟度の異なる学生が多いため、他の学生と比較するのではなく、学生の自身のパフォーマンスや提出物を経時的に比較し、改善すべき点と良い点を同時にフィードバックするようになった。そして、「再履修だから・・・」のような発言は極力避け、他のレギュラークラスとの比較をしないようにした(ストラテジー1)。
- ② クラス全員で単位修得を達成することを目標にしていることを伝えた上で、ペアやグループワークを通じ、クラスメイトは競争相手ではないことを理解させた。さらにピア・エディ

ティングを行うことによって、教員だけではなくクラスメイトを頼れる存在として認識し、協同して課題を完成するように導いた（ストラテジー 2）。

- ③ 発表内容の正誤に関係なく、発表の回数に応じて発表点を与えた。（ストラテジー 3）。
- ④ 週に 1 回ライティング課題を提出することを義務付け、評価を明白にするために、次の授業で数名の学生が提出したライティング課題を OHP で全員に見せ、具体的な評価基準や評点を示した（ストラテジー 4）。

5. 2. 4 協同的学習集団の促進を目指したストラテジー

再履修クラスは、他の英語必修クラスとは異なり、学年や習熟度が異なる学生が集まっており、クラスとして「まとまる」ことが難しい。それゆえに支持的風土を重視する必要がある。そこで、Dörnyei (2001) の協同的学習集団を促進する以下の 7 つストラテジーを実践することにした。

- ① 学習者間の交流、協力、個々の情報の共有を促す。
- ② 学期の初めに、学習者が打ち解けるようなアクティビティを取り入れる。
- ③ 定期的にグループタスクを取り入れる。
- ④ 課外活動を行う。
- ⑤ 座席を固定しない。
- ⑥ クラス全体で完成させるタスクやグループ間で競争するゲームを取り入れる。
- ⑦ グループの名前やキャラクターを作る。

5. 2. 5 授業内での協同的学習集団の形成を目指したストラテジーの応用と実践

- ① 毎授業の最初に、自分の近況に関する Announcement をしてもらい、情報の共有だけではなく、学生同士が質問をする機会を与え、お互いのことを知る機会を作った（ストラテジー 1）。
- ② 授業初日にアイスブレイクとして、ペア、4 人、8 人とグループの人数を大きくしていきながら名前を覚えることができるようなアクティビティを行い、次回の授業でクラス全員の顔と名前と好きなことを書くタスクを与えた（ストラテジー 2）。
- ③ 毎回の授業でペアやグループタスクを取り入れた。例えば、ノーベル賞を題材として扱った際には、興味のある過去のノーベル賞受賞者についてペアでプレゼンテーションを行い、ピア・エバリュエーションを行った（ストラテジー 3）。
- ④ ライティングセンターや学習支援センターへクラスで行き、利用方法を確認した（ストラテジー 4）。
- ⑤ 教室の後ろ側に着席しないように座席を指定しているが、毎回の授業でグループワークを

行うため、その際には座席を移動させ席を固定しないようにした（ストラテジー 5）。

- ⑥ 地震を題材として扱った際には、クラス全体で地震対策キットに入れる10つの物をディスカッションで決定させたり、グループ対抗で代替エネルギーに関するクイズ作成を行ったりした（ストラテジー 6）。
- ⑦ グループ対抗のアクティビティをする場合は、学生が自分たちのグループ名を考えた（ストラテジー 7）。

5.2.6 短大生再履修クラス用ストラテジーの提案

Dörnyei (2001) の提言に基づくストラテジー以外に、学生の授業理解度や動機づけに効果があった教授・学習ストラテジーを以下にまとめる。

- ① 受容する。
- ② 良い競争関係を作る。
- ③ 自己決定する機会を多く設ける。
- ④ テキストの内容を映像等を用い、より理解しやすくする。

5.3 事後調査の結果（12月）と考察

授業実践に対する反応や英語学習に関する質問紙調査では、23名から（資料 2）、記述式項目については22名から有効回答が得られた。記述式回答を KJ 法により分析した結果を図 2 に示す。

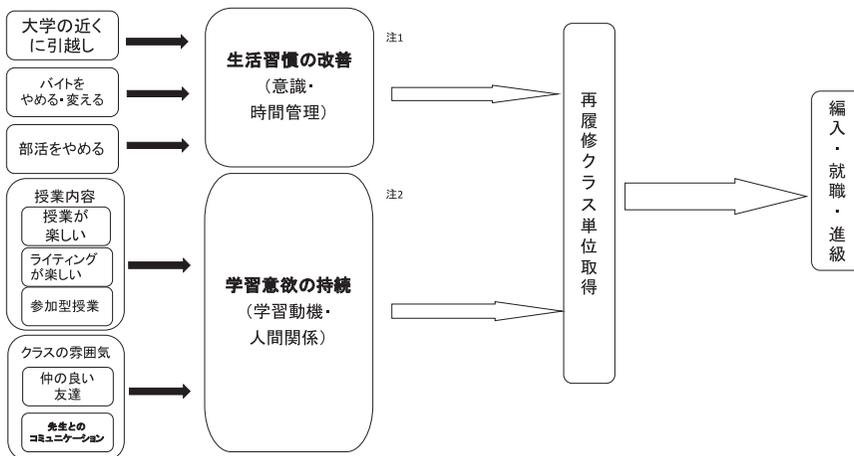


図 2：昨年度と変わったこと

注 1：『生活習慣の改善』については、「バイトをやめて宿題とか授業に集中できるようになった」「朝ベッドから出られるように、目覚ましをベッドから離れたところに置いた。それでも

だめなときは家族に起こしてもらった」等の記述があった。

注2：『学習意欲の持続』については、「目標を立てて、楽しく授業できてよかった」「パラグラフを書くときに自分で考えるようになった」「授業をほぼ休まずにきて、積極的に発言した」「ライティングでも長い文章で書くように心がけた」等の記述があった。

5.3.1 授業の理解度と楽しさに関する肯定的な回答

「昨年度と変わったこと」について、クラスの授業内容や雰囲気に関する記述が最も多く27件の記述があった。授業内容では、「授業への取り組み方や考え、姿勢が変わった。楽しい授業には行きたくなった」、「話を聞くだけの授業だと、行かなくてもいいという気持ちになるけれど、この授業を受けてから人前で自主的に話すことができるようになった」、クラスの雰囲気に関しては、「必修を落とすことは、良いことではないが、個性的で素直なみんなに会えて、仲の良い友達もできていい経験ができた」、「先生は、私たちのことを理解してくれ、過度の期待もせず、心地よい環境で授業を受けさせてくれた」などという記述があった。

まず、授業に対する理解度の変容を調べるために、5件法で実施した授業の理解度についてt検定を行ったところ。その結果、 $t(22)=3.45, p<.01$ となり、授業に対する理解度が、1%水準で0.48ポイント有意に上昇したことが確認できた。

さらに、「この授業の内容はよく理解できた」、「この授業は楽しかった」という質問に対して96%の学生が肯定的な回答をしていた。記述式回答では、「去年はプレゼンのある日は欠席し、グループワークとかには参加しなかったが、今年は、積極的に参加した」という記述があったことから、授業の理解度が学習意欲の持続に繋がった可能性があると考えられる。再履修クラス受講の理由の一つとして、授業の不理解度が挙げられていたが、この点においては一定の改善が行われたと考えられる。

5.3.2 生活習慣の改善と目標

再履修受講理由の一番に挙げられていた生活習慣は、「バイトをやめた」、「朝早く起きる努力をした」、「規則正しい生活に変えることができた」などという記述が8件あったことから、生活習慣の改善が、出席率の改善につながったことが窺えた。

また、留年をしておらず、当該授業だけを再履修している2年生の学生は、3年次編入試験や就職活動という、具体的な目標ができ、授業に取り組む姿勢が昨年度と変わったという記述が4件あった。

5.4 単位修得率

2013（平成25）年度秋学期の短期大学部英語必修科目の再履修クラスは計7クラス（約170

名) 開講されており、全再履修クラスの平均の単位修得率は約60%だった。なお、本研究対象クラスの単位修得率は74.2%で、授業実践の一定の効果があったものと推測される。単位を修得できなかった学生の内半数は、1度も出席しておらず、それ以外の学生も出席回数が少なく、授業を通じて有効な指導ができなかった。次年度からは、欠席回数を重ねる前に、より早い段階で学生と連絡を取り、出席を促す必要があると考える。

6. 課題

単位修得率は、再履修ではない他の通常の授業と比較しても、低くはないが、次年度はより高い単位修得率を目指し、取り組む必要がある。さらに学期中に1度も出席していない学生や、回数だけ出席した学生と、授業担当者として関わりをもつ方策を工夫しなければならない。

今回使用した質問紙は再履修者の特性を把握するには不十分であり、今回の結果を基に、次年度は学生の特性をより深く知るために、「不安要素」や「学習意欲」に関する項目の修正・追加を行った質問紙をデザインする必要がある。

最後に対象者が1クラスと少数であるため、この調査で得た結果は、限定的であり、一般化するまでには到らない。

注

- 1) Integrated English B: Writing & Discussion of Social Issues (秋学期Integrated English D) とは、Integrated English A: Reading & Understanding of Social Issues (秋学期Integrated English C) と同時開講されている短期大学部1年次春学期英語必修科目。Social Issues (社会問題) への理解を深め、幅広い知識を身につけることを目標としている。2つのクラスは、共通のテーマを使用し、Integrated English A/Cでは受信力(リーディング・リスニング)にIntegrated English B/Dでは発信力(スピーキング・ライティング)に重点を置いた授業が展開されている。
- 2) リメディアル教育とは、大きく分けて入学前教育、高校までの教科教育復習、大学の学習活動の入門、大学での講義の補習・復習を指す。
- 3) KJ法とは、民族地理学者の川喜田二郎によって開発された発想法。学習者の自由記述データなどの質的データを分析する際に使われる手法。
- 4) GTECとは、習熟度別クラス分けに使用されている、英語コミュニケーション能力を測定するオンラインテスト。
- 5) ピア・エディティングとは、学生同士でお互いのライティング課題の内容、構成、文法などについてフィードバックを行うこと。

6) 言語不安とは、学習者が外国語や第二言語でコミュニケーションをする際に感じる恐れや不安のこと。

参考文献

- Arnold, Jane. (1999). *Affect in Language learning*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Dörnyei, Zoltán. (2001). *Motivational Strategies in the Language Classroom*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 川喜田 二郎 (1967). 『発想法』中公新書.
- 清田 洋一 (2010). 「リメディアル教育における自尊感情と英語学習」『リメディアル教育研究』, 5(1), 日本リメディアル教育学会, 37—43.
- 平田 和彦 (2010). 「大学の外国語学部における必修科目再履修者の現状と取り組み」『関西外国語大学 研究論集』, 91, 関西外国語大学, 247—265.
- 松宮 新吾 (2012). 「早期英語教育が中等学校英語教育に及ぼす影響についての調査研究」『関西外国語大学 研究論集』, 96, 関西外国語大学, 81—91.
- 竹内 理・水本 篤 (2012). 『外国語教育研究ハンドブック』松柏社.
- 田中 博晃 (2011). 「質的研究のための評価基準: KJ法を用いた動機づけ研究での例」『外国語教育メディア学会関西支部 メソドロジー研究部会 2011年度報告論集』, 外国語教育メディア学会関西支部メソドロジー研究部会, 106—120.
- 津田 晶子 (2007). 「大学必修英語の再履修学生に関する調査と考察」『リメディアル教育研究』, 2(1), 日本リメディアル教育学会, 1—6.
- 山本以和子 (2000). 「リメディアル教育の実施についての大学の意見」ベネッセ教育研究開発センター. Retrieved from <http://berd.benesse.jp/berd/center/open/report/kyoikukaikaku/2000/kaisetu/remedial.html>

(はら・めぐみ 短期大学部講師)

資料1：基本統計量

No.	9月質問項目	人数	平均	標準偏差	度数分布				
					5	4	3	2	1
1	ライティングが得意だ。	26	2.19	1.02	0	4	4	11	7
2	スピーキングが得意だ。	26	2.15	0.78	0	1	7	13	5
3	リスニングが得意だ。	26	2.50	1.03	1	2	11	7	5
4	リーディングが得意だ。	26	2.62	1.10	2	2	10	8	4
5	英語に自信がない。	26	3.54	1.07	5	9	8	3	1
6	文法力をつけたい。	26	4.35	1.06	16	6	2	1	1
7	語彙力をつけたい。	26	4.35	1.13	16	7	1	0	2
8	リスニング力をつけたい。	26	4.42	1.14	18	5	1	0	2
9	リーディング力をつけたい。	26	4.23	1.27	16	6	0	2	2
10	スピーキング力をつけたい。	26	4.54	0.86	17	8	0	0	1
11	この授業の内容はよく理解できている。	26	3.81	0.85	6	10	9	1	0
12	この授業の内容はためになる。	26	4.35	0.80	13	10	2	1	0
13	この授業では辞書をよく使っている。	26	4.04	1.25	14	4	4	3	1
14	授業中にノートをとることができている。	26	3.73	0.96	7	7	10	2	0
15	勉強することがいやだ。	26	2.88	1.03	2	5	8	10	1
16	大学がおもしろくない。	26	2.69	1.19	3	2	9	8	4
17	この授業がおもしろくない。	26	2.04	1.11	1	1	7	6	11
18	新しいクラスは不安だ。	26	2.85	1.26	2	7	7	5	5
19	ライティングを先生にチェックしてもらいたい。	26	3.31	1.29	6	5	9	3	3
20	黒板に英文を書くのはいやだ。	26	2.77	1.34	2	6	10	0	8
21	自分に自信がない。	26	3.62	0.98	6	7	10	3	0
22	TOEFLやTOEICで高得点を取得したい。	26	4.23	0.86	11	12	1	2	0
23	ライティングやテストで高い評価を得たい。	26	4.42	0.86	16	6	3	1	0
24	コミュニケーション能力を向上させたい。	26	3.81	1.02	9	5	10	2	0
25	再履修クラスでより興味深く楽しく学びたい。	26	4.15	1.12	14	5	5	1	1
26	将来、仕事で英語を使いたい。	26	3.73	1.37	12	2	7	3	2
27	4年生大学へ編入学したい。	26	3.15	1.69	8	6	2	2	8
28	将来の目標が決まっている。	26	3.42	1.42	8	5	7	2	4
29	外国のことに興味がある。	26	4.35	0.89	15	6	4	1	0
30	外国人の人と生活してみたい。	26	3.77	1.39	12	4	4	4	2

資料2：基本統計量

No.	12月質問項目	人数	平均	標準偏差	度数分布				
					5	4	3	2	1
1	ライティングが得意だ。	23	2.43	0.99	0	4	6	9	4
2	スピーキングが得意だ。	23	2.09	0.73	0	0	7	11	5
3	リーディングが得意だ。	23	2.65	1.03	1	3	9	7	3
4	英語に自信がない。	23	3.91	0.90	6	11	4	2	0
5	自分に自信がない。	23	3.30	1.11	4	4	12	1	2
6	この授業は楽しかった。	23	4.57	0.73	15	7	0	1	0
7	将来の目標がきまっている。	23	3.70	1.06	6	8	5	4	0
8	この授業の内容はよく理解できた。	23	4.35	0.71	11	9	3	0	0
9	この授業でコミュニケーション能力がついた。	23	4.00	0.74	5	14	3	1	0
10	パラグラフが書けるようになった。	23	3.96	0.93	6	13	1	3	0
11	プレゼンテーションは楽しかった。	23	3.39	1.12	5	5	7	6	0
12	文法力がついた。	23	3.65	0.98	4	11	4	4	0
13	語彙力がついた。	23	3.43	0.99	2	11	6	3	1
14	自分の意見を英語で表現できるようになった。	23	3.57	1.04	3	12	4	3	1
15	これからもライティングの勉強を続けたい。	23	4.26	0.86	11	8	3	1	0